

平成 22 年度

## 病害虫発生予報第 4 号

平成 22 年 7 月 22 日

### 三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ<http://www.mate.pref.mie.jp/boiyosyo/>

## 目 次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠	7
4. 予察項目の見方	13
5. 今月のトピックス（チャのチャ炭疽病について）	14
6. 気象のデータ	15
7. おしらせ	17

## 1. 向こう 1 か月の予報と対策

### 1) 作物

イネでは、穂いもち、イネクロカメムシ、セジロウンカの発生量は**やや多**と予想されますので、発生状況に応じて薬剤防除をしてください。白菜枯病、斑点米カメムシ類、トビイロウンカの発生量は**平年並**、紋枯病、ツマグロヨコバイの発生量は**やや少**と予想されます。

ダイズでは、吸実性カメムシ類の発生量は**やや多**と予想されますので、発生状況に注意してください。ハスモンヨトウの発生量は**平年並**、紫斑病、コガネムシ類の発生量は**少**と予想されます。

### 2) 果樹

カンキツでは、かいよう病（中晩柑）の発生は**多**と予想されますので、伝染源となる発病葉及び発病枝は除去して、圃場外で処分してください。また、天候（風雨）に注意し、適切に薬剤防除をしてください。黒点病、かいよう病（温州みかん）、ミカンハダニの発生量は**平年並**、チャノキイロ

アザミウマの発生量は**少**と予想されます。

果樹共通では、果樹カメムシ類の発生量は**多**と予想されます。圃場内をよく観察しカンキツ、ナシ、カキ等での被害発生に注意してください。

### 3) 茶

チャでは、炭疽病、チャノキイロアザミウマの発生量は**やや少**、カンザワハダニ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノコカクモンハマキの発生量は**少**と予想されます。チャノコカクモンハマキの発生時期は**やや遅**と予想されます。

### 4) 野菜

イチゴでは、炭疽病の発生量は**やや多**と予想されますので、罹病株は除去し、的確な防除に努めてください。

## 2. 作物別の状況

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月		8月		
						下旬	下旬	中旬	下旬	
イネ	穂いもち	—	やや多	大	高		<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 病害虫発生予察注意報第4号（7月13日発表）。</li> <li>2) 穂いもち防除は、穂ばらみ期から穂揃い期の予防散布が重要です。</li> <li>3) 追加防除を行う場合は、農薬使用基準に注意しましょう。</li> </ol>			
	紋枯病	—	やや少	中	低		<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 前年、発生の多かった圃場では注意して下さい。</li> </ol>			
	白葉枯病	—	平年並	小	低		<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 「みえのゆめ」は弱い品種なので注意が必要です。</li> </ol>			
	斑点米カメムシ類	—	平年並	中	普通		<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 周辺圃場よりも出穂の早い圃場では、被害が集中する可能性があります。</li> <li>2) 開花期から穂揃い期の広域一斉防除が効果的です。</li> <li>3) 多発する場合は、糊熟期までに追加防除を行ってください。</li> </ol>			
	イネクロカメムシ	—	やや多	中	普通		<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 発生圃場では、これから出すくみ穂や白穂被害が目立つようになります。</li> <li>2) 日中は株元に潜んでいるため、薬剤散布は株元までかかるように行ってください。</li> </ol>			

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項	
						7月	8月				
						平年比	平年比	程度	平年比		下旬
イネ	ツマグロヨコバイ	—	やや少	中	低	成虫密度					1) 9月上旬頃までに収穫する圃場では、実害はほとんどありません。
	セジロウンカ	—	やや多	小	低	成虫密度					1) 本年は6月中旬以降、まとまった飛来がありました(病害虫防除技術情報第6号・7月13日発表)。 2) 県南部を中心とした常発地では、圃場を見回り、発生状況を確認しましょう。 3) 株元を注意して観察しましょう。葉鞘が黄変したり、成虫や幼虫が多発している場合は、被害が発生する可能性がありますので、早急に防除してください。
	トビイロウンカ	—	平年並	小	低	成虫密度					1) 本年は多飛来がありません。
ダイズ	紫斑病	—	少	小	低	発病密度					1) これから播種する圃場では、種子消毒を徹底しましょう。
	コガネムシ類	—	少	小	低	成虫密度					1) 発生の見られない場合は、防除の必要はありません。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
ダイズ	ハスモンヨトウ	—	平年並	小	普通			被害量		1) 白変葉を目印に早期発見に努め、若齢幼虫期に防除して下さい。
	吸実性カメムシ類	—	やや多	中	普通			開花 ↓		1) 本年は特にクサギカメムシとイチモンジカメムシの飛来に注意して下さい。 2) 薬剤散布は広域一斉防除が効果的です。 3) 開花終期から莢伸長期に防除して下さい。
カンキツ	黒点病	—	平年並	小	普通	発病密度				1) 薬剤散布を定期的実施し、8月下旬まで感染防止に努めてください。 2) 梅雨明けと共に感染源となる枯れ枝が増加するので、切除に努めてください。
	かいよう病	—	温州 平年並 中晩柑 多	小 大	低 高	発病密度				1) 病害虫発生予察注意報第3号(7月1日発表)。 2) 現段階で果実・夏枝に病斑が見られる圃場では、発病した枝・葉・果実を除去し、早急に薬剤防除を行ってください。 3) 防風対策に努め、台風の接近が予想される場合には、直前に防除してください。 4) 高接樹や幼木については、ミカンハモグリガの防除も徹底してください。
	ミカンハダニ	—	平年並	中	普通	成ダニ密度				1) 高温により活動が停滞する時期なので、1葉当りの寄生虫数を確認し、発生が少なければ当面防除の必要はありません。 2) 1葉当たりの雌成虫寄生数が0.5~1.0頭程度を目安に防除してください。 3) 防除が必要な場合は、同一系統の薬剤の連用を避けてください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
カンキツ	チャノキイロアザミウマ	—	少	小	低					<ol style="list-style-type: none"> <li>寄生果率 10% になった時を防除の目安にしてください。</li> <li>7月以降は、寄生部位が果頂部に移ります。</li> </ol>
果樹共通	カメムシ類	—	多	大	高					<ol style="list-style-type: none"> <li>例年飛来が多く見られる圃場では、圃場内の観察をきめ細かく行ってください。</li> <li>樹園地（特にカンキツ、ナシ、カキ）には局所的に飛来してくることがあります。昨年発生が多かった圃場周辺では、注意してください。</li> <li>ナシ、ブドウの有袋栽培では、袋と果実が密着すると、袋の上から加害されることがあるので注意してください。</li> </ol>
チャ	炭疽病	—	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> <li>三番茶芽の開葉初期に防除してください。</li> <li>新葉が展開するときに降雨があると感染します。</li> <li>深刈整枝を行うなら防除の必要はありません。</li> </ol>
	カンザワハダニ	—	少	小	低					<ol style="list-style-type: none"> <li>高温により活動が停滞する時期なので、発生が少なければ当面は防除の必要はありません。</li> </ol>
	チャノミドリヒメヨコバイ	—	少	小	低					<ol style="list-style-type: none"> <li>三番茶の生育期は発生が多くなるので注意してください。</li> </ol>

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
チャヤ	チャノキイロアザミウマ	—	やや少	小	普通					1) 三番茶芽の開葉初期に防除してください。 2) 三番茶の生育期は発生が多くなるので注意してください。
	チャノコカクモンハマキ	やや遅	少	小	低					1) 第3世代幼虫の防除時期は、孵化直後～2齢幼虫期までで、第2世代成虫発生のピークの1週間後が防除適期です。 2) 放任園で多発がみられる場合は管理が必要です。
イチゴ	炭疽病	—	やや多	中	普通					1) これからの高温期にかけて、葉かき後の定期的な防除と、降雨後の防除を徹底してください。 2) 薬剤散布は、株元まで十分かかるよう、畝やベンチの両側からも散布してください。 3) 罹病した株は、感染源にならないようすみやかに除去してください。 4) 灌水は、水滴が跳ね返らないようにしてください。

### 3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	穂いもち	－	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（7月16日発表）によると、気温は低くない予想（－）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、葉いもちの発生圃場率45.3%（平年40.3%）とやや多、発病度4.1（平年5.0）とやや少、上位葉への進展率3.2%（平年2.0%）と多（＋）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少～多（概してやや多）（＋）</p> <p>考察：巡回調査結果および一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	紋枯病	－	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（7月16日発表）によると、気温は低くない予想（±）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、発生圃場率5.9%（平年11.8%）と少、被害株率0.7%（平年4.0%）と少（－）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～少（概して少）（－）</p> <p>考察：現状の発生量は少と考えられますが、今後の増加を考慮して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	白葉枯病	－	平年並	<p>要因</p> <p>1) 6月中旬以降、梅雨時期の多雨による浸冠水被害は無（－）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、発生圃場率0%（平年1.2%）と平年並に少ない傾向（±）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無（－）</p> <p>考察：特に増加要因がなく、巡回調査結果および一般圃場の発生状況から、予想発生量は平年並に少と考えます。</p>
	斑点米カメムシ類	－	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（松阪市・4月第1半旬～7月第4半旬）では、誘殺数はアカスジカスミカメ71頭（平年23.8頭）と多、アカヒゲホソミドリカスミカメ122頭（平年39.1頭）と多（＋）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、圃場および畦畔イネ科雑草すくい取りによる中型種の成幼虫の発生地点率は、ホソハリカメムシ26.0%（平年22.2%）と多、クモヘリカメムシ8.7%（平年6.3%）と多、シラホシカメムシ類7.3%（平年10.9%）と少。同調査における成幼虫数はホソハリカメムシ0.5頭（平年2.0頭）と少、クモヘリカメムシ0.4頭（平年6.6頭）と少、シラホシカメムシ類0.09頭（平年1.3頭）と少（±）</p> <p>3) 巡回調査圃場（7月第2週）では、圃場および畦畔イネ科雑草すくい取りによる微小種（アカスジカスミカメ）の成幼虫の発生地点率は35.3%（平年10.8%）と多、成幼虫数は3.9頭（平年4.0頭）と平年並（＋）</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は無～やや多（概して平年並）（±）</p> <p>考察：予察灯および巡回調査結果から、微小種の発生量はやや多の状況ですが、主要な加害種である中型種（ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシ類）の現状の発生量と今後の増加を考慮して、予想発生量は平年並と考えます。</p>



作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	イネクロカメムシ	－	やや多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（松阪市・4月第1半旬～7月第2半旬）では、誘殺数は水田位置23頭（平年10.7頭）と多、畑位置277頭（平年215.4頭）と多（+）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、発生圃場率33.4%（7年平均18.8%）と多の傾向、被害株率4.8%（7年平均3.1%）と多の傾向（+）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少～平年並（概して平年並）（±）</p> <p>考察： 予察灯および巡回調査圃場結果を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	－	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（4月第1半旬～7月第2半旬）では、誘殺数は松阪市で0頭（平年21.0頭）と少、伊賀市で107頭（平年45.5頭）と多、紀北町で22頭（平年2.1頭）と多、御浜町で5頭（平年3.2頭）とやや多の傾向（+）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、発生圃場率16.0%（平年28.9%）と少、払い落とし成虫数0.007頭（平年1.2頭）と少、同幼虫数0.6頭（平年3.4頭）と少（-）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並（概して少）（-）</p> <p>考察： 巡回調査結果および一般圃場の発生状況は少ですが、予察灯の状況を考慮して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	セジロウンカ	－	やや多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯では松阪市（4月第1半旬～7月第4半旬）で7頭（平年5.5頭）とやや多の傾向、伊賀市（4月第1半旬～7月第3半旬）で10頭（平年1.6頭）と多の傾向、紀北町（4月第1半旬～7月第2半旬）で5頭（平年30.8頭）と平年並の傾向、御浜町（4月第1半旬～6月第6半旬）で191頭（平年22.9頭）と多の傾向（+）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、紀州における発生圃場率は成虫で28.6%（平年52.7%）と少、ウンカ類幼虫で82.1%（平年38.8%）と多、払い落とし虫数は成虫で0.6頭（平年3.1頭）と少、ウンカ類幼虫で17.7頭（平年3.5頭）と多。また県全体では、発生圃場率は成虫で6.3%（平年16.4%）と少、ウンカ類幼虫で49.3%（平年25.2%）と多、払い落とし虫数は成虫で0.09頭（平年1.7頭）と少、ウンカ類幼虫で3.2頭（平年2.0頭）と多（+）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～やや多（概してやや多）（+）</p> <p>4) 九州各県の病害虫防除所情報（7月13～16日頃発表）では、極多飛来は未確認（-）</p> <p>考察： 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>



作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	トビイロウンカ	—	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>予察灯では松阪市（4月第1半旬～7月第4半旬）で0頭（平年0.3頭）、伊賀市（4月第1半旬～7月第3半旬）で0頭（平年0頭）、紀北町（4月第1半旬～7月第2半旬）で0頭（平年0頭）、御浜町（4月第1半旬～7月第2半旬）で0頭（平年0頭）と平年並に少ない傾向（±）</li> <li>巡回調査圃場（7月第2週）では、発生圃場率0%（平年0.1%）と平年並に少ない傾向、払い落とし虫数0頭（平年0.2頭）と平年並に少ない傾向（±）</li> <li>一般圃場では、発生量は無～平年並（概して少）（-）</li> <li>九州各県の病害虫防除所情報（7月13～16日頃発表）では、多飛来は未確認（-）</li> </ol> <p>考察： 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並に少と考えます。</p>
ダイズ	紫斑病	—	少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>巡回調査圃場（昨年11月）では、紫斑粒発生率0.03%（9年平均0.6%）と少の傾向（-）</li> </ol> <p>考察： 昨年の発生状況から、予想発生量は少と考えます。</p>
	コガネムシ類	—	少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>予察灯（4月第1半旬～7月第3半旬）では、誘殺数はドウガネブイブイ144頭（平年256.1頭）と少、ヒメコガネ68頭（平年109.3頭）と少（-）</li> <li>県予察圃フェロモントラップ（5月上旬～7月上旬）では、誘殺数はマメコガネ7頭（平年209.3頭）と少、ドウガネブイブイ2頭（平年53.2頭）と少、ヒメコガネ4頭（平年22.7頭）と少（-）</li> <li>一般圃場では、発生量は無（-）</li> </ol> <p>考察： 予察灯およびフェロモントラップを重視して、予想発生量は少と考えます。</p>
	ハスモンヨトウ	—	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>県予察圃フェロモントラップ（6月第4半旬～7月第3半旬）では、誘殺数は267頭（平年289.5頭）と平年並（±）</li> <li>一般圃場では、発生量は無（-）</li> </ol> <p>考察： フェロモントラップを重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	吸実性カメムシ類	—	やや多	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>予察灯（4月第1半旬～7月第3半旬）では、誘殺数はアオクサカメムシ73頭（平年95.3頭）とやや少、イチモンジカメムシ68頭（平年24.0頭）と多、クサギカメムシ683頭（平年43.4頭）と多（+）</li> </ol> <p>考察： 予察灯の状況から、予想発生量はやや多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	黒点病	—	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 1か月予報（7月16日発表）によると、平年同様晴れる日が多く、気温は低くない予想（±）</li> <li>2) 県予察圃（7月中旬）では、果実発病度47.0（平年23.3）と多（+）</li> <li>3) 巡回調査圃場（7月第2週）では、果実発病度は0（平年0.4）と少（-）</li> <li>4) 一般圃場では、発生量は平年並（±）</li> <li>5) 感染源となる枯れ枝は平年並（±）</li> </ol> <p>考察： 一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生量は平年並と思われ、大きな増減の要因がないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	かいよう病	—	温州 平年並 中晩柑 多	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 1か月予報（7月16日発表）によると、平年同様晴れる日が多く、気温は低くない予想（±）</li> <li>2) 県予察圃（7月中旬）では、発病葉率12.3%（平年11.3%）と平年並、発病果率16.7%（平年28.2%）と少（-）</li> <li>3) 巡回調査圃場（7月第2週）では、温州みかんは発病葉率0.1%（9年平均0.1%）と平年並の傾向、発病果率0.4%（9年平均0.0%）とやや多の傾向（±）。中晩柑は発病葉率9.6%（9年平均1.8%）、発病果率6.9%（9年平均1.0%）といずれも多の傾向（+）</li> <li>4) 一般圃場では、発生量は並～多（概してやや多）（+）</li> </ol> <p>考察： 現状の発生量は温州みかんは平年並、中晩柑類は多と思われ、大きな増減の要因がないので、予想発生量は温州みかんは平年並、中晩柑は多と考えます。</p>
	ミカンハダニ	—	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 1か月予報（7月16日発表）によると、平年同様晴れる日が多く、気温は低くない予想（±）</li> <li>2) 県予察圃（7月中旬）では、100葉当寄生虫数は、無防除区で7.8頭（平年18.4頭）と少、慣行防除区で3.3頭（平年3.4頭）と平年並（-）</li> <li>3) 巡回調査圃場（7月第2週）では、新葉における平均寄生葉率は13.2%（平年8.5%）と多、1葉当平均寄生虫数は0.49頭（平年0.32頭）と多（+）</li> <li>4) 一般圃場では、発生量は平年並（±）</li> </ol> <p>考察： 現状の発生量は圃場によるばらつきがありますが概して平年並と思われ、大きな増減の要因がないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	—	少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 県予察圃（7月上旬）では、粘着トラップへの誘殺数は0.7頭（平年2.6頭）と少、100果当寄生虫数は0.8頭（平年7.7頭）と少（-）</li> <li>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、被害果率は0.9%（平年1.3%）とやや少（-）</li> <li>3) 一般圃場では、発生量は少～平年並（概してやや少）（-）</li> </ol> <p>考察： 現在の発生量は少と思われ、大きな増減の要因がないので、予想発生量は少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
果樹 共通	カメムシ類	—	多	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 予察灯（御浜町：7月1日～7月10日）では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 18,292 頭（平年 528 頭）と多、ツヤアオカメムシ 102 頭（平年 11 頭）と多（+）</li> <li>2) 予察灯（畑・松阪市：6月11日～7月10日）では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 3,644 頭（平年 269 頭）と多、ツヤアオカメムシ 2,095 頭（平年 88 頭）と多、クサギカメムシ 364 頭（平年 26 頭）と多、（+）</li> <li>3) フェロモントラップ（6月9日～7月8日）では、チャバネアオカメムシ誘殺数は、山地（津市白山町川口）で 1,042 頭（平年 823 頭）とやや多、中間地（津市白山町二本木）で 3,304 頭（平年 1,025 頭）と多、平坦地（松阪市嬉野川北町）で 602 頭（平年 215 頭）と多（+）</li> <li>4) 巡回調査圃場（7月第2週）では、圃場への飛来を確認（+）</li> <li>5) 一般圃場では、やや多～多（概して多）（+）</li> </ol> <p>考察： 現状の発生量は多く、予想発生量は多と考えます。</p>
	炭疽病	—	やや少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 1か月予報（7月16日発表）によると、気温は低くない予想（±）</li> <li>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、発病葉数は 0.8 枚/m<sup>2</sup>（平年 3.5 枚/m<sup>2</sup>）と少（-）</li> <li>3) 一般圃場では、発生量はやや少（-）</li> </ol> <p>考察： 現状の発生量はやや少と思われ、大きな増減の要因はないので、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	カンザワハダニ	—	少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 1か月予報（7月16日発表）によると、気温は低くない予想（-）</li> <li>2) 県予察圃（6月下旬～7月上旬）では、寄生葉率は 0.0%（平年 4.8%）と少、寄生虫数は 0 頭/葉（平年 0.3 頭/葉）と少（-）</li> <li>3) 巡回調査圃場（7月第2週）では、寄生葉率は 0.2%（平年 1.2%）と少、寄生頭数は 0.002 頭/葉（平年 0.031 頭/葉）と少（-）</li> <li>4) 一般圃場では、発生量はやや少（-）</li> </ol> <p>考察： 現状の発生量は少と思われ、大きな増加の要因はないので、予想発生量は少と考えます。</p>
	チャノミドリヒメヨコバイ	—	少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 県予察圃吸引粘着トラップ（6月第5半旬～7月第2半旬）では、誘殺数は 9 頭（平年 16.7 頭）と少（-）</li> <li>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、たたき落とし虫数は 0.4 頭（平年 2.4 頭）と少（-）</li> <li>3) 一般圃場では、発生量はやや少（-）</li> </ol> <p>考察： 現状の発生量は少と思われ、大きな増減の要因はないので、予想発生量は少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノキイロアザミウマ	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃吸引粘着トラップ（6月第5～7月第2半旬）では、誘殺数は4,696頭（平年6,724頭）と少（-）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、たたき落とし虫数は9.0頭（平年25.9頭）と少（-）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや少（-）</p> <p>考察： 現状の発生量はやや少と思われ、大きな増減の要因はないので、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	チャノココクモンハマキ	やや遅	少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃フェロモントラップ（6月第5～7月第2半旬）では、第一世代の誘殺ピークは、7月第1半旬（平年6月第5半旬）と遅（発生時期+）</p> <p>2) 1か月予報（7月16日発表）によると、気温は低くない予想（発生時期-）</p> <p>3) 県予察圃フェロモントラップ（6月第5～7月第2半旬）では、誘殺数は57頭（平年197.0頭）と少（-）</p> <p>4) 巡回調査圃場（7月第2週）では、ハマキムシ類の巻葉数は0/m<sup>2</sup>（平年0.3/m<sup>2</sup>）と少（-）</p> <p>5) 一般圃場では、ハマキムシ類の発生量はやや少（-）</p> <p>考察： 第1世代の発生が遅れていましたが、今後の気温を考慮して、第2世代の発生時期はやや遅と考えます。現状の発生量は少と思われ、大きな増減の要因はないので、予想発生量は少と考えます。</p>
イチゴ	炭疽病	—	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（7月16日発表）によると、平年同様晴れる日が多く(±)、気温は低くない(+) 予想（±）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週、苗床）では、発病株率は0.5%（平年0.3%）とやや多（+）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並～やや多（概してやや多）（+）</p> <p>考察： 現在の発生量はやや多と思われ、大きな増加の要因はないので、予想発生量はやや多と考えます。</p>

## 4. 予察項目の見方

### 1) 「作物別の状況」の見方

**発生時期（平年比）：** 平年の発生月日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数		-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	1	2	3	4	5	6	
評価		早	やや早		平年並				やや遅			遅			

**発生量（平年比）：** 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

		平年値 ↓				
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並		やや多	多

**発生量（程度）：** 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少くなります。「発生量（平年比）」と比べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よ

りやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

**要防除圃場率（平年比）：** 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除をしていればよいと予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要な圃場の割合が相当増加すると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか防除しなくても済むような圃場の割合が相当増加すると予想されます。

低	普通	高
---	----	---

**発生消長の一例：** 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

**防除の注意事項：** 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

### 2) 「発生時期・発生量（平年日）の予察根拠」の見方

(±)：平年並の要因

(+)：発生量増加または発生時期遅延の要因

(-)：発生量減少または発生時期早期化の要因

## 5. 今月のトピックス「チャのチャ炭疽病について」

### 1 被害の大きさ

チャ炭疽病はチャで最も代表的な病害です(図1)。多発すると樹勢が衰え、その後の茶期の新芽の生育が劣り収穫がのぞめません。各茶期の開葉期の1.7葉期ごろが最も感染しやすく、新芽が発病するので収穫した茶葉の品質にも影響します。



図1 炭疽病の多発の様子

### 2 発病の条件

感染適温は25℃～27℃で6月～7月の梅雨期や9月～10月頃の秋雨期の新芽生育期に雨が多いと発生しやすくなります。胞子は葉の病斑上でつくられ雨滴により拡大します。

発芽には12時間の結露時間が必要です。潜伏期間は比較的長く15日～20日間程度であり、発芽して葉の表面から感染します。初期には小さな円形の病斑が出来、その後、拡大して茶褐色の不整形の病斑となります。大きな病斑は葉の半分以上になりなります。病斑葉の大半は落葉します。菌は病葉で越冬し、落葉では死滅します。

品種により感受性が異なり「やぶきた」は弱い品種の一つです。

### 3 似ている病気

炭疽病と同じくチャの代表的な病気である輪斑病とは、次のように区別できます。

表1 炭疽病と輪斑病の違い

	炭疽病(図2)	輪斑病(図3)
発病部位	葉のあちこちから発病	葉の傷口を中心に発病
病斑の特徴	のっぺりした茶褐色の病斑	明瞭な黒褐色の同心円状の模様



図2 炭疽病葉



図3 輪斑病葉

### 4 防除の考え方

発生を抑えるには窒素の過剰施用を避け、圃場周辺の除草、雑木の伐採により日当たり、風通しをよくすることが大切です。薬剤防除では、萌芽期には予防剤、その7日～10日後に治療剤を散布しましょう。

深刈剪定で、発病葉を落としてしまうのも効果があります。

## 6. 気象のデータ

### 東海地方1か月予報 (平成22年7月16日 名古屋地方気象台発表)

東海地方の向こう1か月は、平年と同様に高気圧に覆われて晴れる日が多いですが、上空の寒気の影響を受けて、雷雨の起こりやすい時期がある見込みです

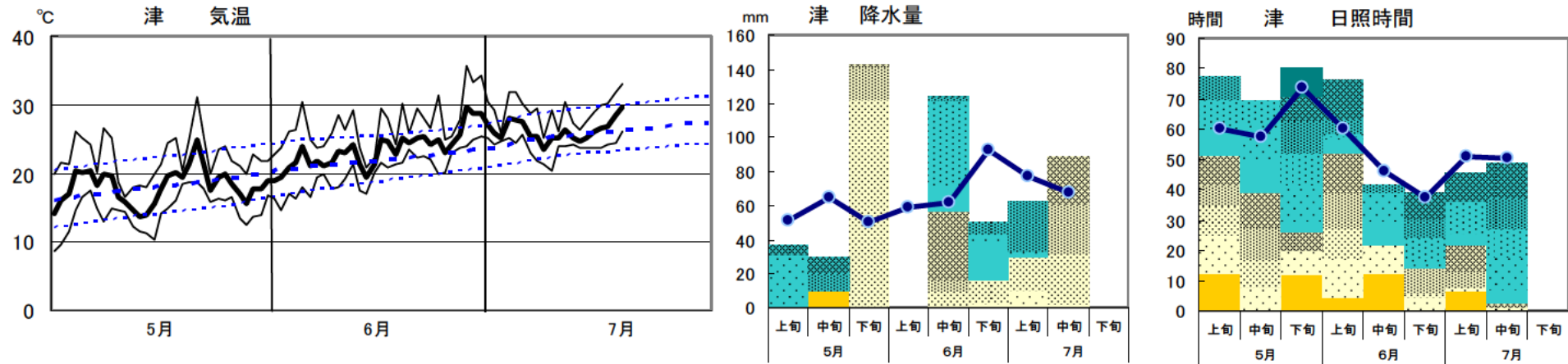
1週目 7月17日～23日	高気圧に覆われて晴れる日が多いでしょう	晴れ日数の 平年値 約4日
2週目 7月24日～30日	平年と同様に高気圧に覆われて晴れる日が多いですが、上空の寒気の影響を受け雷雨の起こりやすい日があるでしょう	同 約4日
3～4週目 7月31日～13日	平年と同様に高気圧に覆われて晴れる日が多い見込みです	同 約9日

### 東海地方週間天気予報 (平成22年7月21日11時 名古屋地方気象台発表)

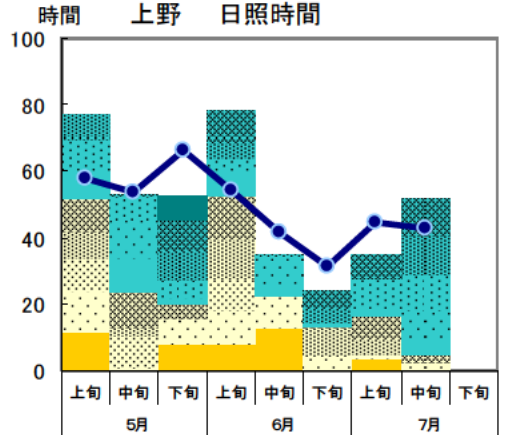
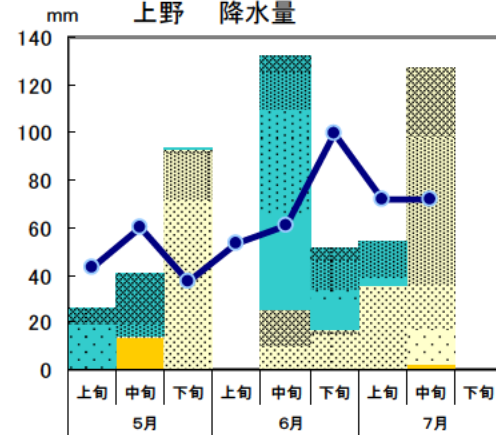
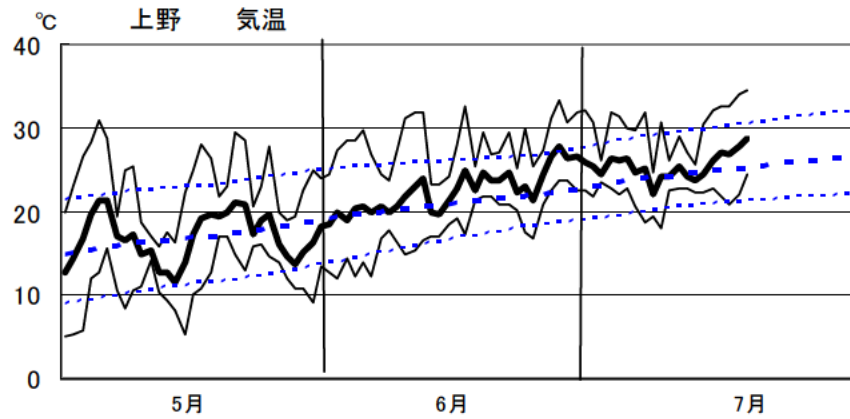
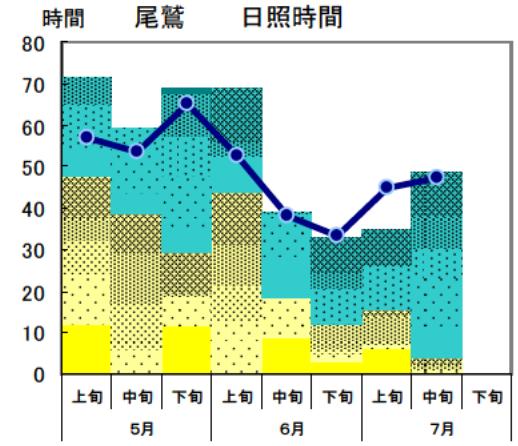
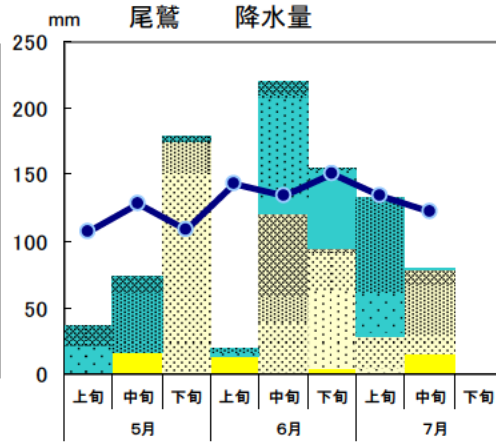
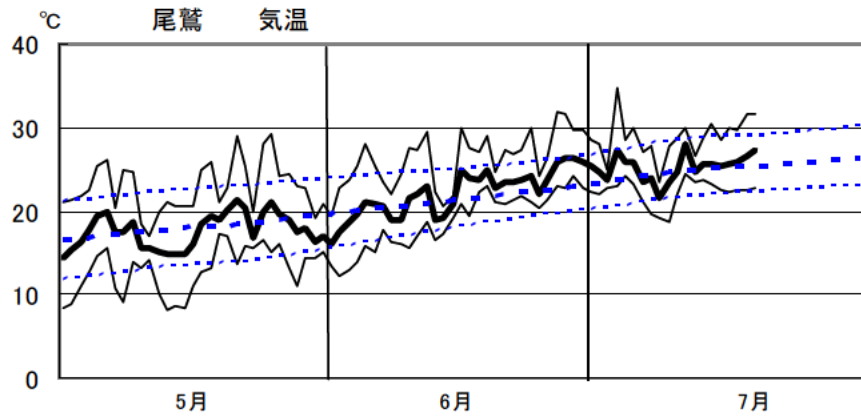
予報期間 7月22日～28日

向こう一週間は、期間のはじめは高気圧に覆われて概ね晴れますが、中頃以降は気圧の谷の影響で雲が広がりやすいでしょう。最高気温と最低気温はともに、概ね平年より高く、期間のはじめはかなり高い見込みです。降水量は、平年より少ない見込みです。

### 気象の日別推移 (気象庁発表データ \_\_ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成) (7月20日まで)







凡例

- 平均
- 最高
- 最低
- - - 平年平均
- - - 平年最高
- - - 平年最低

凡例

- 31日
- 旬10日目
- 旬9日目
- 旬8日目
- 旬7日目
- 旬6日目
- 旬5日目
- 旬4日目
- 旬3日目
- 旬2日目
- 旬1日目
- 旬平均値

凡例

- 31日
- 旬10日目
- 旬9日目
- 旬8日目
- 旬7日目
- 旬6日目
- 旬5日目
- 旬4日目
- 旬3日目
- 旬2日目
- 旬1日目
- 旬平均値

## 7. おしらせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

### 1) 記載基準の注意点

本年度から、平年ほとんど発生のないか非常に少ない病害虫については、平年並に少ない発生状態の「発生量平年比」を「平年並」、「発生量程度」を「小」と記述しています。

### 2) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

- |               |               |
|---------------|---------------|
| 第1回 4月22日(済み) | 第2回 5月27日(済み) |
| 第3回 6月24日(済み) | 第4回 7月22日(今回) |
| 第5回 8月26日(木)  | 第6回 10月21日(木) |
| 第7回 3月17日(木)  |               |

### 3) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

### 4) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアドレスからお入りください。

[http://www.mate.pref.mie.jp/Bojyosyo/files/h22yohotebiki\\_.pdf](http://www.mate.pref.mie.jp/Bojyosyo/files/h22yohotebiki_.pdf)

### 5) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/merumaga.htm>

### 6) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報」

<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm000.html>